

《眼科臨床エキスパート》 糖尿病網膜症診療のすべて

吉村 長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集
北岡 隆, 吉村 長久 編

糖尿病患者の増加と社会の急速な高齢化が相まって、糖尿病網膜症の患者は一向に減る気配がない。むしろ経済状況の悪化が原因なのか、網膜症はおろか糖尿病そのものも無治療で、失明寸前の症例（しかも比較的若年者）に遭遇することも少なくない。日本が世界に誇る高水準の医療に綻びが出始めているのでは、と不安すら覚えてしまう。

糖尿病網膜症は眼科において一般的、そして極めて重要な疾患でありながら、なかなか優れた成書に恵まれなかった。黄斑症の治療や硝子体手術に特化した書籍は多いものの、「一冊丸ごと網膜症」は少なく、あっても共著のため読みづらいものであった。そのような教育上の問題が影響しているのか、紹介を受ける症例の中には、それまでの治療歴に首を傾げたくなるようなものが少なからず存在する。地域での講演会では糖尿病網膜症を頻繁に取り上げるようにしているし、内科と合同の勉強会も定期的に開催しているが、やはり単発の講演では「耳学問」に止まるものかもしれない。

その点、本書は「糖尿病網膜症、丸わかり」とでも副題をつけたくなる内容豊富なものである。長崎大の北岡 隆教授と京大の吉村長久教授が編集を、そしてこの2大学で定期的で開催してきた共同研究会のメンバーが執筆を担当している。このため共著でありながら、その内容は極めて統一されており、記述にブレがみられない。また、眼底写真、蛍光造影写真、OCTがふんだんに、しかも適切な症例が適切なサイズで掲載されている。全紙面の半分以上を画像が占めている

かのような印象すら受ける。超広角走査レーザー検眼鏡による写真が多数掲載されているのも時機に適ったものといえる。

さらに特筆すべきは、通常なら「ちょっと一休み」的に挿入される「ケーススタディ」が、本書の冒頭に、全体の1/5のスペースを費やしていることである。しかも「moderate NPDR だが蛍光眼底造影で進行している症例」など、かなり具体的に、実臨床で判断に迷いがちな症例が並べられている。

治療の項目では、パターンスキャンニングレーザーや抗 VEGF 薬などの最新の方法はもちろんのこと、血管強化薬や血管拡張薬などのどちらかといえば「古典的」治療法にもしっかり紙面が割かれており、先のケーススタディを併せて、臨床現場を見据えた編集方針が読み取れる。

惜しむらくは、網膜症の発症機序の説明が1枚の図で済まされていることである。実臨床の現場でも発症メカニズムへの理解は重要であり、網膜症への治療がかなり進歩したとはいえ、結局のところは破壊的、場当たり的なものに終始している現状を鑑みれば、より根本的な治療法の開発はこれからの眼科に課せられた大きな宿題と言えるだろう。

千大教授・眼科学 山本修一

B5・頁 392 2013 年

定価：本体 17,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01872-2] 医学書院刊